

## 電話の今昔

生家に電話が付いたのは、よく覚えがないが、小学校高等科を卒業した頃だ。小学校、駐在所等はあるが、民家は部落で一、二軒しか電話は引いてなかった。生家は珪藻土会社の購買部になって居たので、引いたのだろう。

円田の電話交換所から、延々と一台当たり二本の鉄線を引く。電線と電線は三十センチ位離して碍子に止めてある。需要家が五軒あれば十本、十軒あれば二十本の鉄線を引く。交換所は円田の郵便局にあったが、部落まで二キロ以上ある。

電線を張った電話柱はあの当時の風物であった。風が吹けば「ヒュウヒュウ」と音をたてる。大河原から、遠刈田迄の軽便鉄道沿線は、電話線は二本だけで、呼び出す時は各駅がいつせいにベルがなるので、ベルをモールス信号の如く断続して各駅を区別し、呼んでいたようだ。

国鉄の沿線には五十本以上も張ってあった所もあったようだ。ケーブル等ない時代だし、銅線は弱いので鉄線を使ったのだろう。電話交換手は若い女性で、夜昼交代で接続作業していた。

電話機に付いているハンドルを回すと、百ボルト位発電する。その電気が交換手のベルを鳴らし、接続部分の扉を開く。交換手は「何番ですか」と聞く。云われた番号に手回し発電器で呼び出し、出たらジャックで繋ぐ。

同じ局内であればすぐ通話が出るが、市外通話だと申

し込んで待たなければならぬ。総て申し込み順である。仙台に掛けると早くて十分、一時間以上なんかは、いつもの事である。東京に掛けると二、三時間、五、六時間もかかる時もある。急ぐ時は急報、もつと急ぐときは、特急報で申し込む。

電話料は急報で二倍、特急報だと三倍である。それでも、なかなか通じない。誰もが急ぐのは同じなようである。

それがどうだろう、現代の電話は。あの時代に今の電話を想像出来たろうか。いやあの時代で無くとも十年前でも、である、携帯電話や、自動車電話は特権階級だけの物であった。普通の電話は何処の家にもある。ダイヤル回せば、日本国中、いや世界中即座に繋がる。携帯電話は、日本国民の七十パーセント持っていると言う、何処にいても即座に通話できる。北海道に居ても、沖縄に居ても同料金だ。テレビ放送が始まったのは、私達が結婚した昭和二十七年頃だ。三十年頃でも持っている人は少なく、白黒テレビだ。今は一人一台、自動車に設置している人もいる。携帯電話もテレビ電話だ。相手の顔を見ながら話ができる。

これから五年、十年、二十年後どう変わるのだろう。子供や孫達の時代は、今から想像出来ない。六十年前の電話事情を知っている私達は、短い年代での通信の発達は驚異であり、幸せだったと思われ感慨に耽り、あの時代の記憶が甦り懐かしい。